

ゆるやかな拡大を目指して

おおさか災害支援 ネットワーク

「プレゼン大会」を開催!

昨年度から、災害支援にかかわる団体間の「顔の見える関係づくり」を目指して、学びと情報交換を中心とした「おおさか災害支援ネットワーク」を開催しています。企画や当日の運営は、世話役団体である府社協、大阪市社協、堺市社協、大阪ボランティア協会、大阪府生活協同組合連合会、大阪市淀川区社協、日本赤十字社大阪府支部の7団体を中心に、協働して行っています。

第4回の開催となる今回は、

7月6日に大阪府立大学(U-siteなんば)で開催し、大阪府内外から計54団体93人が参加し、うち新規で19団体の参画を得ました。

当日は、参加団体の活動内容について一層理解を深め、ネットワークづくりがスムーズに進むことを期待して「プレゼン大会」を実施しました。「防災・減災啓発」、「災害・防災ボランティア」、「要配慮者支援/ネットワークを活かした取り組み」をテーマに3会場に分かれ、合計15団体から現在の取り組み状況について発表がありました。

そのプレゼンの様子を少し紹介すると、「災害用炊き出し釜」を販売する企業からは、被災地における炊き出し活動について報告があり、「社会貢献として社員のボランティアを育成し、炊き出しのプロを目指す」と力強い言葉がありました。また、障がい者支援を行う団体からは、当事者を含めた地域ぐるみの避難訓練の大切さについて説明がありました。さらに、仏教系の団体からは、府内に3,300カ所あるお寺の機能や特性を活かした連携について提案があり

ました。

参加者からは、「災害時に発揮できる役割は、日頃の活動の延長にあることを再確認した」「平時から災害への意識を高めるべきだと気づかされた」「このネットワークの特徴は多様な主体の参加。お互いの強み・弱みを理解し、今後連携を深めたい」との感想が聞かれました。

プレゼン大会後は、同会場で交流会を行い、活発に情報交換や活動紹介が行われ、お互いを知り、理解し合おうという熱気にあふれていました。今後も、気軽に参加できる場を設けていくとともに、新たな参加団体を募りながら、大阪らしい災害支援のネットワークの輪を広げていきます。



大阪府立大学ボランティアセンターに、会場やプレゼン大会でご協力いただきました

寝屋川市民児協

課題を抱える親子を地域で支える

～児童委員、主任児童委員は地域住民に寄り添う身近な相談役～

地域の親子と笑顔で話せる関係づくり

寝屋川市民児協では、平成20年から市の「こんにちには赤ちゃん訪問事業」に協力。登下校の見守りや小学校の訪問、子育てサロンや幼稚園(保育所)児との交流を通じ、日頃から関係機関との連携強化と地域の親子と笑顔で話せる関係づくりを行っています。



幼稚園児と交流

また、生活困窮者自立支援制度が今年度から始まり、関係機関や地域住民と連携

しながら、経済的に困窮し、地域から孤立する住民を早期に発見し、つなぐ役割を担う民生委員・児童委員への期待

関係機関との連携の中で

Aさんは、校区委員長である児童委員(Bさん)と支援内容を協議しました。子どもへの支援は常に校区委員長と共有し、ケースに応じては地区担当の児童委員と連携していきます。

今回は、子ども家庭センターや家庭児童相談室、学校、保育園などとケース会議を重ね、関係機関との役割分担を行いました。行政は注意喚起や緊急時の母子分離を行い、Aさんは「制服がない、食べるものがない」という母親のSOSをいつでも受け止められる身近な存在に。自治会長や地区の児童委員にも地域での見守りや近隣住民との橋渡し役を依頼しながら、関係機関と今後の関わりを共に検討できる体制づくりを行いました。

地域で問題がある度に引越すなど、地域で孤立していた親子でしたが、数年かけて関わっていく中で少しずつAさんとの信頼関係を築くことができ、関係機関と支援を再検討。母親は生活保護を受け、生活を立て直すこと、精神科の受診と家の片付けを決めました。関係機関総出でパッカー車3台分のごみを片付け、生活も落ち着きました。

地域福祉を
支える「ひと」

このコーナーでは、地域福祉の実践を支える「ひと」に話を伺い、「地域での出会い(きっかけ)」や「活動のひろがり」を紹介しています。

今回は、第4回「おおさか災害支援ネットワーク」から、新たに世話役団体に加わった日本赤十字社大阪府支部の担当者を紹介します。



木村 弘之さん
振興部
青少年・ボランティア課
ボランティア係長

◎世話役団体に参画した理由を
教えてください

A被災地支援では、さまざまな関係者が力を合わせ「協働」することで大きな力を発揮することができ、協働するためには、日頃から顔の見える関係が必要で

世話役団体に加わることで、災害時のボランティア調整の中心となる市区町村社協の方や、得意分野などで活躍している各団体の方と連携し、赤十字のボランティアネットワークともつなげることで災害支援力を高めることに貢献したいと考えたからです。

◎おおさか災害支援ネットワークに対する抱負や今後の期待
についてお聞かせください

A赤十字は民間の団体ですが、これまでの災害救護の歴史か

ら、行政や警察・消防等の関係機関と深く連携してきました。大阪で災害支援ボランティア活動を安全に行うために、これまでの経験を活かしたいと思います。

以前、医療救護班の派遣調整を担当していましたが、実際の現場では、「訓練で一緒だった」などの人間関係によって助けられました。特に発災直後の被災地では、現場へ安全に到達するためのアドバースが危険回避に役立ったこともあります。

おおさか災害支援ネットワークがあることで、参加団体が早く「まいど!」でつながれる関係になればと期待します。

◎赤十字の災害ボランティアに関する、今後の仕組みや体制づくりは?

四條畷市社協
地域貢献委員会を設立!

四條畷市社協では、6月29日に「四條畷市地域貢献委員会」の設立総会が開かれました。

本委員会は市内の19の社会福祉施設と社協で構成されており、総会で「高齢、障がい、子どもの各分野の福祉施設等と社協が連携し、それぞれの機能を生かして、地域社会に貢献する」ことが確認されました。

また、27年度の事業計画として、研修会や交流会の企画実施、高齢・障がい・子どもといった分野ごとに、地域とともに福祉課題の抽出や問題解決の具体的対策を考える「地域づくり会議」を展開していく方向性が決まりました。

府社協では、社会福祉法人改革の動向や地域貢献委員会のあり方について学ぶ市町村社協会長・理事向けの研修会や、地域貢献委員会相互の意見交流会の開催を予定しており、府内での一層の設置促進、活性化を進めていきます。



が高まっています。

地域から孤立する親子

7人の子どもがいる家庭への支援依頼が市の家庭児童相談室から寝屋川市主任児童委員(Aさん)にありました。子どもたちは、保育園や学校に行けない状態が続き、母親の家計のやりくりがうまくできず、満足に食事ができていませんでした。家はごみであふれかえり、家の前には子どもたちが夜遅くまで集まって騒いでいて、近隣住民から非難と心配の声があがっていました。

地域の身近な
相談役として

「色々な家庭の事情があるが、どの子どもも皆幸せになる権利がある。そのためにも少しでも自分ができることがあればやっていきたい」とAさん。また、Bさんも「地域の課題は地域の人と協力して解決していきたい。課題を抱える親子を排除するのではなく、暮らしやすい環境を地域住民と協力してつくっていきたい。一人で悩んでいる親に寄り添っていくことが重要」と話していました。

A赤十字には個人の防災ボランティアや、アマチュア無線技術などの特技を活かした特殊奉仕団が登録されており、赤十字のすべてのボランティアが、災害時には「災害ボランティア」として活動することとなっています。

研修は基礎・実践などと階層別に行っていますが、ボランティアも自主勉強会を定期的に開催し、自らスキルアップを図っています。訓練も災害を想定した炊き出しやエアテントの構築などを行う習熟訓練に加え、ボランティアセンターの立ちあげ訓練も行っています。

災害の被害を減らすには、

◎府社協との連携について期待
や要望は?

事前に防災・減災に取り組むことが効果的です。平時の啓発活動にもあわせて取り組み、地域の防災力を高めたいと思います。

A府社協さんは、大阪府内で災害が発生した場合、被災地の市町村社協に対する支援調整の中心になると聞いています。日頃から連携し、手順を確認することで、赤十字の訓練されたボランティアを素早く地域での活動に結びつけることができると思います。

また、今後も訓練や研修を相互に行い、課題を一つひとつ解決していきたいですね。